

オーストラリアに興味関心をもつ一般読者にも強く勧めたい一冊である。

本書ではオーストラリアの多文化社会について、とりわけアジア系のエスニックグループの特徴から論じていた。アジア諸国からの移民は着実に数を増やしており、中国系移民については「マイノリティの中のマジョリティ」としてその存在感を強めている。また、2000年代以降は中東諸国やアフリカ諸国からの移民も急増しており、その数は今後着実に増え続けるだろうと言われている。ゆえに、オーストラリアの都市社会は今後さらなる多文化化の進展が予想され、それに伴いエスニックグループもより一層複雑化すると思われる。加えて、コラムで取り上げられていたLGBTやアボリジニなども多文化主義を象徴する側面をもっており、事実、これらを題材とした多文化社会に関わる研究も確実に蓄積されつつある。今後はこうした近年の研究動向も踏まえつつ、ますます細分化されたオーストラリアの多文化社会の在り方を論じた学術研究書の出版が待ち望まれる。

(磯野 巧)

注

- 1) ABS 2016 Census QuickStats
http://www.censusdata.abs.gov.au/census_services/getproduct/census/2016/quickstat/036
(最終閲覧日：2018年5月5日)
- 2) ニュージーランド出身者の割合は2.2%である。

文 献

田中豊裕 (2011)：『豪州読本 オーストラリアをまるごと読む』大学教育出版。

菊地俊夫編著：『ツーリズムの地理学－観光から考える地域の魅力－』二宮書店、2018年3月刊、222p., 3,200円（税別）

本書は、首都大学東京の観光科学域に所縁のある地理学者を中心とする20人の執筆陣が多面的な観光現象を各自の視点から論じるという、かなり自由度の高い書物である。「自由度が高い」というのは決して揶揄ではない。読者は興味深い論考（章）から、きままに読み進めることが可能だ。

本書は大きく「都市」、「農村」、「自然」の三つのパートに収められた17本の論考と、序章・終章とあわせて19章から構成される。簡単に各論考の内容を紹介しよう。

1編「都市地域における観光研究」には、6本の論考が収められている。1章「東京・裏原宿におけるアパレル小売店の集積に関する研究」（矢部直人）では、アパレル小売店が集積する「裏原宿」地域を取り上げ、アパレル小売店の集積過程および集積の意味について考察した。

2章「東京・隅田川における河川交通の変遷と観光の可能性」（太田 慧）では、東京の河川ならびに臨海部を対象とした東京ウォーターフロントにおける水上バス航路の変遷と、運航船舶の多様化による観光アトラクション機能の変化を議論した。

3章「東京・小平市におけるオープンガーデンの活用と地域資源の連携」（小池拓矢）では、行政主導のオープンガーデンを行っている東京都小平市を挙げ、オープンガーデンへの来訪者に対する調査を通して、地域におけるオープンガーデンの特徴と機能を考察した。

4章「ベルギー・国際都市ブリュッセルにおけるMICE」（杉本興運）では、ヨーロッパ屈指の国際都市・ブリュッセルにおける観光やMICE（ビジネスイベント）にみる文化・交流機能の特

徴について検討し、ブリュッセルの地的特色が明らかにされた。

5章「オーストラリア・メルボルンのセグリゲーションに基づく文化観光の発展」(堤 純)では、「レストラン・キャピタル」とも称されるメルボルンにおける文化観光の特性を、多文化社会であるとともにエスニックセグリゲーションが固着化する状況から解き明かした。

6章「カナダ・沿海諸州におけるアカディアンの文化と観光の発展」(大石太郎)では、カナダの東部沿海諸州に居住するフランス系住民アカディアンの文化とそれを活用した観光振興について検討がなされた。

続く2編「農村地域における観光研究」にも6本の論考がある。7章「東京都における観光農園の立地と果樹園経営の持続性」(林 琢也)では、東京都内における観光農園の展開と果樹農業の持続性について、統計が整備された2015年以降のデータおよび現地調査に基づき考察を行った。

8章「大都市遠郊における農村資源の観光利用と女性の役割～北海道・十勝地方」(鷹取泰子)では、北海道・十勝地方を事例として、道内の観光資源を概観するとともに、具体例を踏まえ、大都市遠郊における農村資源の観光利用を考えるとともに、農山村におけるツーリズムの将来性について展望した。

9章「茨城県北部における地域おこしのメカニズムと観光化の可能性」(小原規宏)では、観光資源や宿泊施設の集積が弱く、滞在型観光地の形成が遅れた茨城県において、特に地域の衰退が懸念される県北地域を対象に、地域おこしの取り組みの検討を通して、観光化の可能性を論じた。

10章「イギリスのピーク・ディストリクトにおけるルーラル・ジェントリフィケーション」(飯塚 遼)では、イングランド中央部に位置するユールグレイブ村(ピーク・ディストリクト)を

事例に、ルーラル・ジェントリフィケーションの影響について考察した。

11章「オーストラリアのハンターヴァレーにおけるワインツーリズムの地域的展開とその特徴」(菊地俊夫)では、オーストラリア・ニューサウスウェールズ州のハンターヴァレーにおける個々のワイナリーに焦点を当て、地域固有の歴史・文化や社会・経済などと関連付けながら、ワイン産業を地域観光の主軸にしたワインツーリズムの発展について明らかにした。

12章「中国における農村資源の活用と農村観光の展開」(張 貴民)では、観光業の成長著しい中国を事例に、農村資源の地域的特徴および活用の方針の分析を通して、農村観光の発展について論じた。

さらに3編「自然地域における観光研究」には、5本の論考がある。13章「スリランカの国立公園における野生動物の観光の共生」(ラナウィーラゲ・エランガ)では、スリランカの自然保護区域を事例に、人間とゾウの軋轢の対策や野生ゾウの保護の持続におけるワイルドライフツーリズムの役割を検討した。

14章「ルーマニアのドナウデルタにおける自然環境の保全とエコツーリズム」(佐々木リディア)では、ドナウデルタ(ルーマニア)における自然環境の保護と社会・経済的発展を両立させる方法としてエコツーリズムに着目し、その実態と課題について論じた。

15章「マレーシアの熱帯雨林における野生生物とサステイナブルツーリズム」(沼田真也ほか)では、豊かな森林資源に恵まれ生物多様性の宝庫である東南アジアの熱帯雨林を対象として、マレーシアの国立公園における自然・野生生物・観光の検討からサステイナブルツーリズムの可能性を考察した。

16章「浅間山北麓ジオパークにおけるジオ資

源の活用とストーリー性の構築」(坂口 豪)では、浅間山北麓ジオパークを事例に、火山のジオパークが多く活動している日本において、どのようにジオストーリーを構築・展開させるのか、また他のジオパークと差別化を図るのか、ストーリーの構築とジオツーリズムの可能性について論じられた。

17章「小笠原父島の観光と自然資源の適正利用—南島の事例を中心として—」(菊地俊夫ほか)では、小笠原諸島・父島近海に位置する南島を事例に、通称「小笠原ルール」導入の経緯とその効用、および観光への影響を明らかにするとともに、自然資源の適正な観光利用について検討した。

本書へのコメントとして、まず編著者である菊地俊夫氏の観光地理学への貢献を指摘しておきたい。もともと農業・農村地理学者として著名な菊地氏は、首都大学東京の組織改編により、観光科学部門の所属に転じて以降、精力的に観光地理学に関わる業績を蓄積してきた。『観光を学ぶ』(二宮書店)や『よくわかる観光学』シリーズ(朝倉書店)、『フードツーリズムのすすめ』(フレグランスジャーナル社)など、観光学にかかわる一連の著書・編著書はフィールドワークに基づく菊地流地理学の成果である。

菊地流地理学とは何か、誤解を恐れずに言えば、「楽しむ」地理学である。未知なる場所への冒険・探検を旨とする地理学に立ち、知的営為としての好奇心の探究を通して、現地に赴くことにより身体感覚としての満足感をも充足するという、何とも贅沢な地理学なのだ。また「人たらし」の地理学でもある。菊地氏はその学識の深さと暖かい人柄により、学界のみならず各界に広くネットワークを築いておられる。菊地氏の才知あふれるアイディアと豊かな人脈のマッチングにより、本書のような多くの執筆者を抱える編著が次々と

上梓されてきたと言っても過言ではあるまい。

菊地氏は序章において本書の位置づけとして、地理学からの観光研究のフレームワークを述べている。そこでは「観光によって変化する地域を、あるいは観光現象が多く分布する地域を読み解く典型的なツールとしての地理学」(p.9)であると述べ、その地理学には、「地(ち)」の「理(ことわり)」を「学(まなぶ)」系統地理学と、「地(ち)」を「誌(しるす)」地誌学的方法という伝統的な二区分があり、その融合的視座が観光研究にも必要であることが示される。その際に、静態的な見方と動態的な見方を取り入れつつ、観光現象を時空間的にとらえることが肝要であり、同時に観光現象を地域のなかで理解するうえで景観分析の有効性について主張している。

観光学は学際的な領域であるが、地理学の有効性を示すことは必ずしも容易ではない。しかしながら本書の各論考は、地理学が育んできた伝統的な手法が地域の魅力を描き出すうえで有益であり、現状分析にとどまらず持続的な地域社会の発展にその知見が有用であることを教えてくれる。

また本書は観光学・観光研究に対する地理学からの貢献にとどまらず、地理学に対する観光研究の魅力もアピールしている。評者は、人間による場所(土地)の資源化の営みを探究することが地理学の基礎であると考えている。地域の魅力を資源化し、外部(時には内部)の人たちにその魅力を知らしめることが観光に通じるのであり、本書の副題に掲げられた「観光から考える地域の魅力」とは、観光研究がもたらす地理学への有用性を示唆しているものであろう。

最後に本書への要望についても述べておこう。総勢20人もの執筆者による論集ということで、取り上げられたテーマや地域の多様性が本書の魅力であることは言うまでもない。しかしながら、その分どうしてもアラカルト感が残ってしまう。

章ごとに文体が異なるのは個性でよいが、「本研究では～」と「本章では～」といった記述の混在はやや気になった。また「書下ろし」の章と既往論文に基づいた章との硬軟のバランスがもう少し「軟」よりであると、地理になじみのない読者にも読みやすいかと思われる。例えば5章のような筆致に評者は惹かれるが（どんな筆致かはぜひ本書で確認されたい）、随所に散りばめられたコラム（目次には掲載されていない）がその役割を果たしているとも言えるだろう。

揚げ足取りのような要望を述べたが、それによって本書の価値が減じられるわけではない。現代世界の諸地域におけるツーリズムの多様な展開

の様相を知るうえで本書はよい手がかりを与えてくれる。本書を手にとられた方は、観光地理学の魅力と多様性に誘われるに違いない。そのような読者が一人でも増えることを期待したい。

（松井圭介）

文 献

- 菊地俊夫（2017）：『フードツーリズムのすすめ：スローライフを楽しむために』フレグランスジャーナル社。
 菊地俊夫・松村公明編著（2016）：『文化ツーリズム学』朝倉書店。
 菊地俊夫・有馬貴之編著（2015）：『自然ツーリズム学』朝倉書店。
 菊地俊夫編（2008）：『観光を学ぶ―楽しむことから学ぶ観光学』二宮書店。